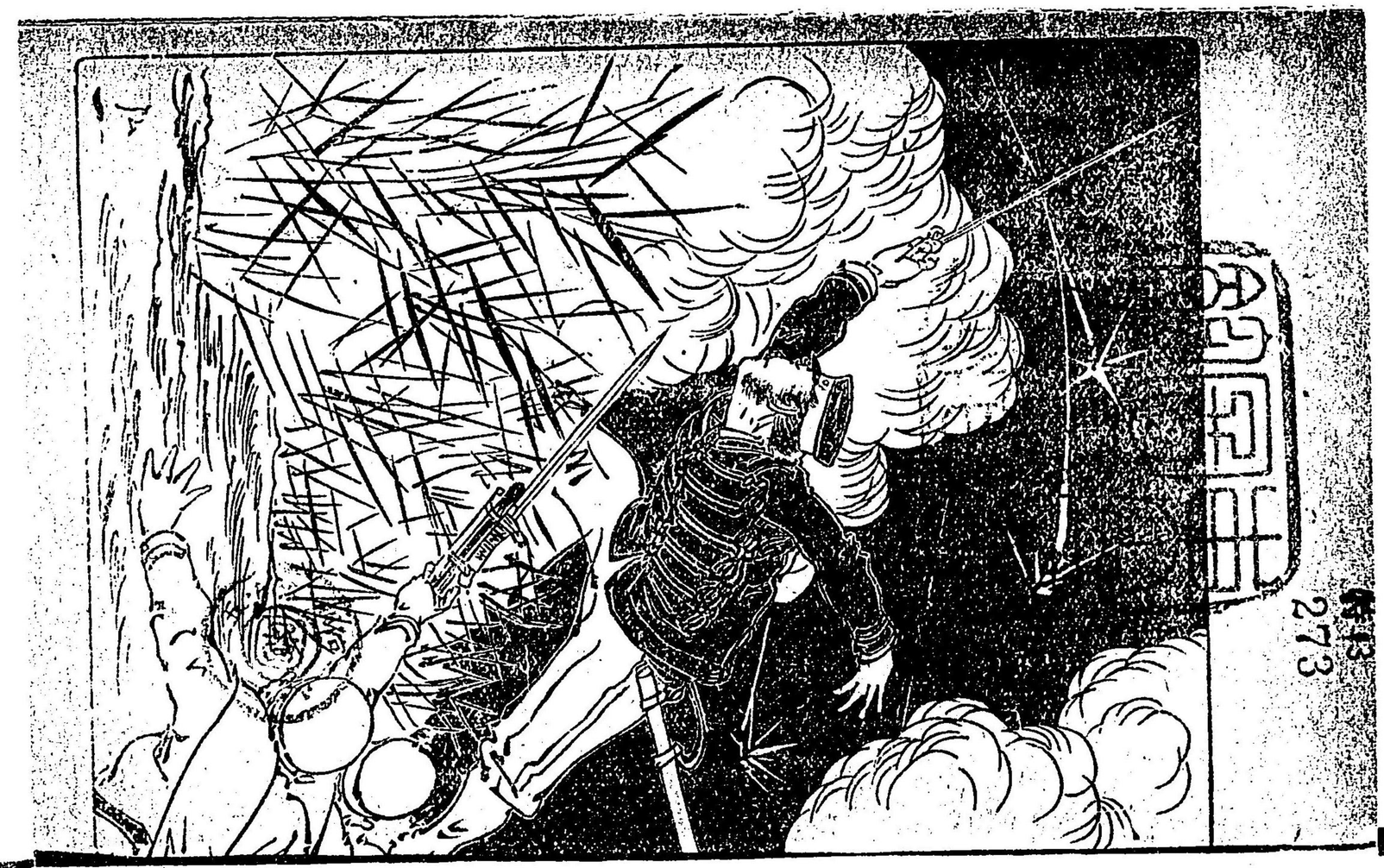
166
30-
378

勇氣之教育

全



序

戰記を詳にせんと欲せば、軍士の傳を詳にせざるべからず、懦夫をして立たしむるも、落魄の士をして喜望の道に誘ふも、皆古來英雄の事蹟によるを可かりとす。スマイルスの自助傳は如何なりしか、書中の人傑は今尚活動して、泰西文物の隆盛を促しつゝあるにあらずや、彼等は啻に泰西のみにあらず、到る處に尊重され、到る處に珍重され、王者の宰相となり。武士の片腕となり。事業家の相談合手となり柳に入れば柳となり、椀に入れば椀となりて、よく立志の勸誘者となる、この書斯くの如きの良著作ならねど、著者が精神に到りては。豈にスマイルスに劣る可けんや、松崎大尉の如き、白神剛叉子の如き、皆これ帝國軍人の好摸範なり。氣盲必要の今日、たれ等得やすからざるの美談を蒐集して、世の少年諸子が友となさば又益する處多くあるべしと陳紛閑をならべるものは。讀者と仝じ一少年なる

醒酬生

勇氣の一教育

●松崎大尉

昔の人がよく云ふ言葉ですが、死は鴻毛より輕しと云ふ事があります、然し普通の場合では、鴻毛より輕しと云ふ樣なことはありません、諸君よく考へて御覽なさい、人間が[illegible]て居るのは、[illegible]からです。されば人の尤も重んぜるものは何かと云へば命[illegible]ぐのも、職人が夜昼絶間なく働くのも、商人が一錢二錢の利益をあくまで[illegible]する處は、其生命のためにするのです、生命さへ輕んじたら、働くにも及ばず、又稼ぐ必要もありません。

人は誰一本性飛して、それ藥だ油藥だと云ッて騷ぐ位ですから、生命は何程大切なものかを御覽なさい。

この樣が大切な生命を、鴻毛より輕しと云ふは、ちと受取にくい事ですが、時によれば、いと〻重き生命が、泰山よりも尚重くなるをがあります、たッた一の生命が、或時は鴻毛

より輕くあり、又或時は泰山よりも重くあるとは、一体何樣した譯かと云へば、ろれは場合によるのであります。

ろれでは生命が泰山よりも重き場合とは、何う云ふ時であるかと云へば、人とつまらない事を爭ッたり、或は僅の事より決鬪などを仕樣とする場合には、實に死が泰山よりも重くなります。

ろこで死鴻毛より輕しと云ふのは、前の樣な事に反して、自分の生命を捐てた爲に、一國の大事が成るとかと云ふ樣な時を指したものです、どうか諸君は、よくこの區別を辨へて下さい。

さて松崎大尉とは、諸君も存じの軍人ですが、大尉の履歷をしらべて見ると、即ち左の通りであります。

大尉は元熊本の藩士で、性來至ッて志慮深く、幼少の頃より大層本が好きで、今で云ふと學校ですが、この頃は寺子屋と云ッた學問所へ通ふ、外の子供は草紙の上へ、へ（のの）もへじだの又は、山水天狗、へまむし入道、ろれでなければお團子などを書き、お師匠樣の

目を掠めて遊ぶ中に。大尉は決して其樣なをせず、他人が十度習ふ處は百度も繰返して勉強をし、一生懸命に出精したから、ろの進歩は目に立ッて、れ師匠樣も大層に誉めたろうです。

この工合で年を重ねて行き、十四五才の頃には、すでに詩を賦し、文を草する位になりました、大尉はこの樣に學問に精を出しながらも、心の中では、學問を以て身を立て樣とは思はず、何樣にかしても軍人となり、國家のために尽くしたいと云ふ大望を抱き、明治七年の頃、とう〳〵故郷の熊本を出で、月を重ねて東京に着き、種々の苦心をした上で陸軍士官學校の生徒となり、數年間の苦學はつひに素志を貫かしめ、西南の乱が起ッた時、少將試補に任せられ、征討軍に從ッて鎭西に渡り、肥筑の境に轉戰して、頗る軍功があッたとのことです。

さしもの南洲も、刀折れ彈盡きて、城山の白露と消え、西南の大亂は八ヶ月の後を以て平定し、官軍は高く凱歌を唱へて旋りました。

ろの時功を以て勳六等に叙せられ、それより段々と昇進して、つひに今日の位地におられ

ました

東洋の風雲急にして、我國出師のをあるに及び、大尉は大隊長古志正綱氏と共に、大島少將に從ッて、萬里遠征の途に登り、暫時は龍山の本部にありましたが、清兵打攘の事を、韓廷より委托され、いよ〳〵牙山の攻撃が始まらうとする時、大尉は武田少佐の右翼軍に加はり、山田少尉と共に前衛となりて、安城渡へ向ひました。

安城渡の夜戰は、明治二十七年七月二十八日の三更を以て開かれました、全軍互に戒め合ひ、本隊よりの號令を今か〳〵と待つ計りて、三軍鎮りて一言をも發するものなく、人は枚を嚙み、馬を轡を卷き、手に汗握ッて待つ間程おく、嘲嘲たる喇叭が、夜風につれて聞ゑました。スワ進行と勇み立ち、前軍すでに動きろむれば、つゞく軍勢も足並閑に打立ちました、時に叢雲は風に散りて、一片の月影淸く、露は葉末に宿りて、何となくもの哀れ氣に思はれました。

敵は牙山を以て本營として居るのですが、ろこでは我軍を防ぐによろしからぢと、成歡と云ふ處に堡壘を築き、ろの處で我攻撃軍を喰ひ止め樣としたのです。

成歡と云ふ處は、後に山陵起伏して森林茂り、前には一面の水田を控へ、道は狹く、丘は高く、ろの上安城渡と云ふ小川があッて、敵を防ぐには屈竟の要地であります、たゞでさへこの樣に路が惡い上に、淸兵は安城の橋を斷切り、且つ水田の泥を氾濫したから、惡い道は尙惡く、歩行けばすぐに滑る樣に仕かけたのです。

成歡の地形はこの樣な工合ですから、我攻撃軍の困難あるとは云ふを待たぢして明らかです。

大尉達の前軍は、この樣な困難を凌いで、キチン村と云ふ處より、數町を距ッた、安城渡へと達しましたが。見れば案の如く、ろの橋桁は半分切られ、この川を渡るには是非とも流へ這入らなければ、なりません、水の淺深さへも解らぬ川へ、無闇か飛込むのは、隨分危いとですが、勇氣が充ちた人々は、これらの川をものともせず、いづれも裸躰になッて、難なく川を渡りました。

川を渡れば、蛇の樣な細道は、たゞ一筋よりありません、前隊はこの道を辿ッてキチン村に達し、後を見れば、後隊は未だ川を渡り切らず、闇をかすめて水音の聞ゑるのみです、

この時武田中佐は、通辨を呼んで、村の家に就をて、成歡の路をたづねさせました、通辨は命をうけて、向ふに見へる人家へ行かうとすると、白い着物を着た一人の男は、突然中佐の前へやッて來ました。中佐は聲を放ちて

「何ものだ。

と云ふ間もなく、ろの聲に恐れたのか、白い着物を着た男は、一目散に逃出しました、この男は逃出しながら、一聲高く叫びました。

「ろれ怪しい奴。

といづれも後を追はうとする時、一聲の筒音は耳を破りて、彈丸は我軍隊の中へ飛散りました。

彈丸の飛來る方へ眼を注げば、行手の民家には敵兵わッて、我軍隊を狙撃しました、ろの間は大凡二町計りを距ッた處で、今一歩進み行かば、實に大事が起ッたのです。しかしながら、素より敵は望む處、いでや神州武士の手並を見せんと、咄嗟の間に銃を裝ひ、敵を目がけて發砲しました。

戰はこの時に於て始まりました、これ實に我日本帝國の軍隊が、世界第一の最大國、清國の軍隊と戰を交へた始りです。

この時に當り、大尉は一中隊の兵を率ゐて、右翼枝隊の前衛となり、敵兵を搜索しながら進み行き、山田少尉の一小隊は、尖兵となりて最先に進みました。又田邊大尉の一中隊は、枝隊本部の先頭に立ち、芦澤大尉の工兵一中隊はろの後に隨ゐ、前後各々相當の距離を保ッて進行しました。

漲渡る濁流は瀬枕高く岸を洗ひ、雲間を洩れた片破月は水に淀みて影定めなく、芦の葉に戲るゝ螢火と共に、時に明滅して居る体。

山田少尉は、河を渡ると同時に道を誤ッて袋の樣な處へ這入りました。少尉は民家を叩いて。案内者を求めましたが、それに應ずるもの一人もなく、大ひに困難をして居る折柄、大尉も亦この道へ迷ッて來ました。

松崎、山田の両將校は、こゝに相談を極め、今や道を引返さうとする時、民舍の中に潜んで居た敵は、忽然として現はれ出で、鉄砲の筒口を揃へて打立てました。

ろの彈丸は雨の如く、さしもの我軍も面を向けかねて、俄か水田を越へ、土手の間に姿をかくして、暫時はろの猛威を避け、一には本隊の到るを待ッて居ました。

敵の砲擊はいよ〳〵劇しく、一發の彈丸は我軍の潛んで居る土手を貫き、山田少尉の左の脚を傷けました。

この有樣を見るよりも、大尉は怒心頭より發し、惡くき敵の振舞ひかな、よしや兵勢銳くとも、多寡の知れたる清國勢、何時迄かくてあるべきかと、部下を勵して、土手の中よりあらはれ出で、喚き叫んで戰ひました、隊長かくの如くなれば、兵士は何とて默して居ませう、いづれも勇氣をふるひ起して、猛る敵中へ突進しました、この時敵より打出す彈丸大尉の肩を貫きさしも豪氣の大尉なれど、この痛手に堪らばこそ、

「殘念なり。」

と一聲高く叫んだまゝ、つひに打死を致しました。

この時に於て大尉の死は、實に鴻毛よりも輕いのです、當時成歡を破り、牙山を陷入れ、清軍を打攘ッて我國の武勇を鷄林八道に鳴渡らしたのは、皆大尉が先登の功によるものです。

源平盛衰記を讀んだ方はよくご存じん玄でせうか、厳島の逆櫓爭ひに、義經は梶原一家を辱しめて、僅五十余人の小勢を以て、この上もない大風を冒し、八島の浦に平家の大軍と戰ッた時、平家の大將、能登守敎經は、いかで義經を打取らうと。小舟に打乘ッて陸に上り天地に響く大音あげ。

「これは平家の御中人にさるものありと聞かつる、能登の守敎經にい、源九郎や存す、敎經が心の矢竹受けて見ゐへ。」

と呼はりました。義經は聞ゆる猛將、牛若丸の昔より武術鍛練の勇者ですから、今能登守が一言を聞くよりも、敵に軍を挑まれて、何とて只はあるべきかと、駒を陣頭に乘出して、

「珍らしや能登の守殿、いさや九郎を射させゐへ。」

左手に丁と胸金物を叩き、大手を廣げて突立ちました。能登の守は平家方第一の强將、弓矢取ッてはろの右に出づるものがないと云ふ程で、五人張十五束三伏の强弓をかくものでこの矢面に立ッて一人として生命を助かッたものはありません、されば源氏方の人々は手

に汗握ッて、大將の身を氣遣はれて居る內、能登の守は上差の鏑を取ッて弦食はせ、空行く滿月の樣に引堅めて、今や將に切ッて放さうとしました。この時、源氏方の陣中より一騎の强者、面黃糸縅の大鎧に、全玄毛六枚綴の兜を頂き、栗毛の駒に黑鞍置いて打跨り。

「我君危し、我君危し。

と呼はりながら、馬を義經の前に乘据へ、能登の守の矢面に立塞り、飛來る矢をば受けやうとしました。能登の守は折角義經を打たうとしたのに、思ひもよらぬ邪魔が這入ッたのですから、心の中は燃立つ計りで、一聲をふるはして。

「下郎推參なり、そこ退けッ。

と呼はりました、彼の强ものはビクともせず。

「下郎とは心得ぬ、これは陸奥の住人、佐藤庄司が一の子に三郎嗣信と呼ばはるものぞ。

り。いざ〳〵我身を射玉へや。

と。動ぐ樣子もありませんから、能登の守は引堅めた矢を切ッて放ち、先づ嗣信を射やうとしました。嗣信は羽音を聞ひて身を開き、一の矢を取ッて捨て、身づくろひする隙もなく、二の矢に胸を射貫かれて、哀れ屋島の浦の泡と消え、名を後の世に殘しました。

大尉が安城渡の討死は君國のため、嗣信の戰死は一義經のためです、然しろの精神と、武夫の最期を潔くした事に於ては、頗る相似た處があります。

嗣信は主君のために命を鴻毛よりも輕しとし、大尉は君國のために一身を輕しとし、つゐに安城の川浪に武夫の終りを止めました。

人屋島の戰を云へば必ず、嗣信の事を口にします、八百年後の今日、嗣信の名が人口に傳はるは、忠君の精神に依ッてです、後世の人たるもの、嗣信の名を傳ふるが如く、又大尉の武名を千載に傳へて、ろの英魂を慰むるとは、正に爲すべきの事であらうと思ひます。

毎日新聞の詩人は、大尉の戰死を頌へて、全の如くうたゐました。

萬籟無聲草木眠　東方未日月如弦
胡笳俄動安城渡　烽燧忽照牙山嶺
我軍吶喊破曉霧　士馬穩躍如脫兎

敵兵殘夢尚書腐　風聲鶴唳亦恐懼
先登第一是何人　桜崎大尉名直臣
鞍頭叱咤挺身進　意氣壯烈泣鬼神
手中寶刀銳且利　斬人如瓜何容易
紫電寒虹互陸離　頭顱纍々落委地
身立硝煙彈雨中　一死報國立殊功
沙場終濺淋漓血　染得旭旗紅益紅
想起當年鬼將軍　至今英風儼乎在
名震鷄林止兒啼　熊城廓祀三百載
大尉桑梓亦熊城　與鬼將軍有宿盟
九泉相遇共含笑　彼我功名試品評

又有名なる歌人某氏は、大尉の事を悼みて、

水玉と散りて果敢なき安城渡

我か日の本の桜の華を

著者はこの編の終に於て、大尉の逸事をもう少しれ話してこの局を結ばうと思ひます。

○桜崎大尉畫と劃を嗜しむ。

人には道樂と云ふものは必ずあるものです、然し道樂と云ふと人聞きが惡く、女郎買か藝者買の樣なもの計りと思ひますが、その樣なものは道樂と云はずして、遊樂と云ふのであります、買道樂、食道樂、着道樂は格別、道樂と云ふものは、ろの字義の通りて、道を樂しむ、又は君子ろの道に遊ぶと云ふが如く、君子は君子だけの道樂は必ずあるものです、處謂女郎買、藝者買の類は君子の道樂ではなくして、即ち小人の遊樂です、昔の上人が。

人ことに一つのくせはあるものよ
我には許せ敷島の道

とヤしました、この人は即ち作歌が道樂であッたものと見ます、されば世の中で云ふ道樂と云ふものは、嗜好と云ふことを意味して居るのであります。ろこで大尉にも道樂がありました、ろの道樂は何かと云ふに。大尉は大層書物が好きでして、非番の時おろは、一日

書齋に籠ッて、讀書三昧に日を暮し、財を投ぜて買入れた書籍は、書齋の中に山をなして陸軍部内屈指の藏書家であッたそうです。又頗る刀劍が好きで、無數の刀は書と共に大尉の身邊ゐ集められ、大尉はこの二ッを以て、生前の良友とし、書と讀み、劍を拭ふて、英氣を涵ひつゝあッたとのをです。文事あるものは必ず武備ありと。大尉が生前に書劍の二ッを樂んだことは、つひに大尉をして、無上の功名を博さしめた原因です。

○大尉の戰死は偶然ならず。

古志少佐は牙山攻擊の先鋒として進軍しました。桧崎、山田の諸將校は皆少佐の部下にあッたのです、牙山攻擊は七月廿八日と定まり、即ちその前夜は水原府と云ふ處に露營を張ッて居ると、少佐は俄に病を得て陣の中に沒されました。この時大尉は、少佐の枕邊に立ちて、戰死を堅く盟ッたとのをですされば大尉の戰死は、少佐の遺志をつひだゞのと云ッてもひゝ位です。

○誰か欲招魂魄築城

大尉が文事を好まれたことは、すでに諸君へ申して置きましたが、大尉は當に文事を好んだ計りでなく、極めて詩文をよくし、その遺篇も數多あるとのをですが、中にも次の詩の樣おのがあります。

身軀彈丸揚美名　欲招魂魄築佳城
如今憶起硝煙處　耳底猶存叱咤聲

これ大尉が西南の役後に於て賦した詩です、處謂、身軀彈丸揚美名の一句は、自分と自分を用ひの言葉どころはなりました。次句の、欲招魂魄築佳城の言は、そも〳〵誰が蛾り行ひませうか思ふてこゝに到れば、鬼神もろいろ涙の種です

○叱る勿れ。

大尉に一人の子供があります、今年やう〳〵七才の春を迎へて、學校に行初めた年頃です大尉の細君は勿論大尉に深く愛されて居るとで、細君はこの子の養育を以て一身の勤として居た位ですが、大尉は常に細君を戒めて云ふに。

「敎へよ叱る勿れ。

と申されたそうです。敎へよ叱る勿れの一語は、又よく大尉の性行を現はして居ます。

今や我國の軍旗は、遠く北清の天に翻りて九連鳳凰の二城は、すでに我有に歸し、金州も亦屠られて、北京城下の盟を促すも遠からぬことゝなりました。大尉が英靈勇魂亦何分か慰めらるゝことを得ます。

男子たるもの生を受けて軍籍に列し、屍を白沙青草の中に横へるさへあるに、よく先登の功を奏し、かくの如き大名をなす、大尉たるもの死して又恨むる事はありますまい、裏屍馬革これ眞に男子の事ではありますまいか、噫、大尉の如きは軍人の本分を完くしたものであります

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●白神喇叭手

男子志を立てゝ鄕貫を出ず、學もし成らずれば死すとも止まずと云ふ語は、學者の上に計り用ゐらるゝものではなく、死すとも止まずとは、凡て男子の上に用ゐても、決して差支へのないことです。

學を志して鄕貫を出たなら、學業がならなければ死すとも止まぬ精神で居なければなりません、然し軍人たるもの〳〵、志を定めて鄕里を出たなら、敵に對して、死すとも止まぬ精神がなければ、決して本との男子と云ふことは出來ますまい。

成歡役名譽の戰死者、第五師團第二十一聯隊附喇叭手白神源治郎氏の如きは、敵に對して、よく男子たるの本分を盡くしたものです。

氏は岡山縣備中國淺口郡船越村大字水江と云ふ處の人ですが、兩親には早く別れ、一人の兄はあれど、父母存生の頃より家出して、あとは源治郎氏只一人です、杖柱とも頼む、兩親に別れ、打放れて拾小舟の樣になッた源治郎氏は、親類の指圖に隨ッて年を重ね、傳來の田畑に生命を繫ひで十有余年の春秋を過し、適齡の年第五師團に入營し、今度の事が起るに及んで、師團兵と共に、混成旅團に編入され、つひに韓地へ渡りました。

京城の合戰には何事もなくいよ〳〵清兵打攘ひと定まり、全旅團が牙山に向ふ時、第二十一聯隊に屬して龍山の旅團本部を打立ち、牙山をさして進みました。

七月二十八日の夜は、旅團兵盡く素砂場に露營を張り、大島少將を、長岡、武田、福島等の諸參謀と軍議を凝らしつひに夜襲と決しました、然し將校以下にこの事を知らさぬ、たゞ〳〵兵氣を見計ッて居る体でした。

大將にかゝる決議のありとも知らぬ兵士達は、何時戰が始まるをかと、身づくろひはして居るもの〳〵、各々首を長くして、軍令の出するを今か〳〵と待ッて居ました、二十八日の夜は月と共に更渡ッて、山の端の木立も影幽に、四隣陰々として、聞ゆるものは梢渡る夜風と、軍馬の嘶く聞のみでした。

夜も三更の頃忽ち軍令は下りました、今夜直に進行せよと。

さてこそ進軍と、勇立つては見たものゝ、軍令によッて騷もからぬ、聲をかろめ、英氣をかくして進みました、源治郎氏が屬する、第二十一聯隊も、共に軍隊を進めて、齊しく成歡へ取詰め、今や一擧して戰を開こうと云ふ時、源治郎氏は隊長の命令に隨ひ、日頃手馴れし喇叭を携へ、身を陣頭に現はして、一聲高く進軍行を奏しました。嘹喨〳〵喇叭の響は、安城河の水に冴へて、諸軍一同に勇立ち、勇氣日頃に百倍し、敵を望んで乘出す有樣、大波の一度に返すが如くにて、目醒しく見られました、源治郎氏の吹すさむ進軍行が

未だ絶えやらぬ間に、兩軍の鯨波は起り、打出す鉄砲の彈煙は、傾きかゝる月をかくして彈丸さへも飛んで來ました。

物凄き筒音、霰の樣な彈丸、見るものと云ひ、聞くものと云ひ、いづれも命を絶つものゝみですが源治郎氏は、恐れもせず、いよ〳〵高く吹立てゝ、諸軍の英氣を增させました、この時敵兵より打出した一ッの彈丸は、源治郎氏の胸に當り、背後迄も打貫きました、普通のものなら、直とろの場に倒れるのですが、源治郎氏はさらに倒れず、いよ〳〵高く吹立てたが、何を云ふにも大事の痛手、その曲次第に細ると共に敢なく戰死を遂げられました。

源治郎氏は、實にろの氣息が絶える迄も、自分の職を捨てなかッたのです。これ等をこゝ眞に軍人の龜鑑と云ッてもよいのであります。

この戰ひが終ッて後、全軍將士は、皆源治郎氏の鮮血淋漓たる遺體を見て、ろの勇猛義烈を頌して深く哀悼の情を現はしたとのことであります。

源治郎氏の死を哀悼するものは、單に軍人計りでなく、我〳〵の樣なものに到るも、皆ろの戰死を悲しみます。されば我國四千余万の同胞は、一人としてこの名譽ある戰死者の事蹟を知らないものはありません。

諸君は源沼郎氏の戰死を、何とれ考へなさいましたか、これ即ち、死すとも止まぢの精神があッたからです、ろの事柄に異たとではありましたが、隨分古の戰國時代にはこの樣な精神を持ッて居た軍人もありました、鎌倉權五郎景政と云ふ男は、承知の通り、八幡太郎義家の家人で、相摸の國の住人でした。

前九年の役、義家鎭守府將軍に補せられ、阿部の貞任、阿部の宗任等兄弟を征討に赴きました、この時景政も義家に從ひ、陸奥の果に武勇を現はし、諸處の戰に拔群の功名をいたし、鎌倉權五郎と云ふ名は、兩軍の中に鳴渡りました。

或時義家は烏海の柵を攻めて、賊の根據を奪はうと、將士を督して攻寄り、鯨波を作ッて突貫しました、賊もこの柵破られては、必死になッて拒ぎ戰ひ、矢種を惜しまず射かけたからさしもの、義家勢も、少し白けて見えた折柄、賊將阿部れ貞任は、一隊の兵士を率ゐ、柵門八文字に押ならさ、喚き叫んで切て出ました。

賊將貞任は、陸奥立の駿足を陣頭に跳らせ。

「戰はかくこそするものぞ。

と四角八面に馳立てました。然しあから敵手は名に負ふ八幡太郎、武勇の家人も多ひとて、容易に敗軍の擣樣はなく、敵に應じて刃を交へ、兩軍入亂れて戰ふました。ろの有樣は恰も修羅の巷にかはりません。

この時景政は、あはれ功名せんずるものをと、馬を諸處に乘出して、敵の樣子を見て居ましたすると、敵方より一人の士分、大繩目の鎧に、紅栗毛の馬に跨り、手に弓矢を携へて現はれ出で。

「ろこに在すは八幡殿の陪家人にや在すらん、奥州鍛冶の緞へし矢尻、見事受けて見ませかへ。

と言ふより早く、能引兵と切ッて放せば、的は少し外れたれど、景政の左の眼を射貫きました。

これが普通の武士なら、鞍に堪らず仰向樣に落馬も仕かねまじき處ですが、さすがの景政はビクともせず、左の眼に立ッた矢尻を引抜き、一眼を開ふて向ふを見ると。件の敵は逃足出して逃げて行きます。

この有樣を見るよりも、怒心頭より發せし景政、自分の眼を傷つけた矢を咬へ、敵の後より大音揚げて。

「敵に総角見するが陸奥武士の手並なるか、いで〳〵返し矢仕らん。

と追かけながら矢頃を計り、つひにその敵を射落して、當座の恥を雪ぎました。これより景政の名は一際高く、千載の今日に到るも、尙ろの事蹟は口碑に傳はり、死しては鄕里に神と祀られその、祀は鎌倉町の長谷にあります。

權五郎がこの時の精神は、どう云ふものであッたらうか、義家が出征の目的は、勿論國賊を討ちて寰襟を安んじ奉るの精神に違ひない、がろの家人等の思慮に到りては、恐く國家の爲と云ふより、八幡殿の陪爲と云ふ方が深かッたかも知れません、これに反して、源治郎氏の戰死の如きは、一念たゝ國のために死したものです、

景政の心に國家的觀念のあるなしはさておき、ろの頃には、源氏の武士は源氏よりありが

たいものはなく、平家の家人は平家を何より尊とひものと心得、王に勤むると云ふ樣なことは、夢にも知らぬかッたので、主人と思ふは時の大將、尊ひと思ふは自分の主君、ろの出師の目的が何であらうが、善に戰はうと、惡に與さうと、ろんぬ事には頓着なく、目ざす敵手と戰ッて、討死さへしたら、ろれで武士の本分を盡くし得たものと心得て居たのであります。

國家的精神を以て論じたら、日本臣民たるものが、ろの樣なことではすまぬと云ふに違ひなひが、ろの頃の武人と云ふものは、處謂敎へざるの民なのですから仕方がない、宙に敎へざるのみならず、ろの時世と境遇は、彼等をして武將崇拜の念を高めさせたのです、然しながら、死すとも止まずと云ふ精神に到りては、寧ろこれ等の武人が後世に傳へたものと云ッてもいゝ程です。

敵に眼を射られて瞑もせず、ろの矢を以て敵を射殺し、即時に仇を雪いで名をは軍に響かしたのも、敵丸に的ッて倚屈せず、死に到る迄も、その職を捨てぬかッたものとは、ろの心の行道は格別、もと古男子たるの本分を盡くしたものでありませんか。

源治郎氏の遺髪が鄕里に着した時には、鄕党相會していとも、立流な葬儀を營みろの會葬者の如きは、村役場吏員、小學敎員等を始め、無慮五百余名もあッたろうで、中には祭文を朗讀して、氏が亡き魂を慰めんとするものあれば、中には和歌を手向けるものもありてろの功名は口々に喧しく譽を鄕里に高めました

源治郎氏の死を悼み、ろの手柄を頌揚するものは、宙に隣里鄕党のみでなく、近衛軍隊の菊間義清氏は、喇叭卒と題して、右の如くにうたをました。

(一)
渡るにやすき安城の、
敵の打出す彈丸を、
名はいたつらのものなるか、
波はいかりて水さわぎ、

(二)
湧き立ちかへて紅の、
先鋒たりしわが軍の、
血汐は外に道もなく、
苦戰の程ぞ知られける、

(三)

この時一人の喇叭手は、
進め〜と吹きしきる、

（四）

その音忽ち打ち絶えて、
打ち絶えたりしは何故ぞ、

（五）

打ち絶えたりしその時は、
かすかにありしろの時は、

（六）

弾丸のんどを貫けど、
喇叭はなさじ握りつめ、

（七）

たまとろの身は砕けても、
とり佩く大刀の束の間も、
進軍喇叭のすさましき、

再びかすかに聞えたり、
かすかになりしは何故ぞ、

弾丸のんどを貫ぬけり、
熱血氣管にあふれたり、

熱血氣管にあふれども、
左手に杖つく村田銃、

靈魂天地をかけめぐり、

なほ敵軍を破るらん、

（八）

雲山萬里かけへだつ、
君が喇叭のひゝきには、

あな勇しの喇叭手よ、
四千余萬の同胞も、
進むは今といさむなる、

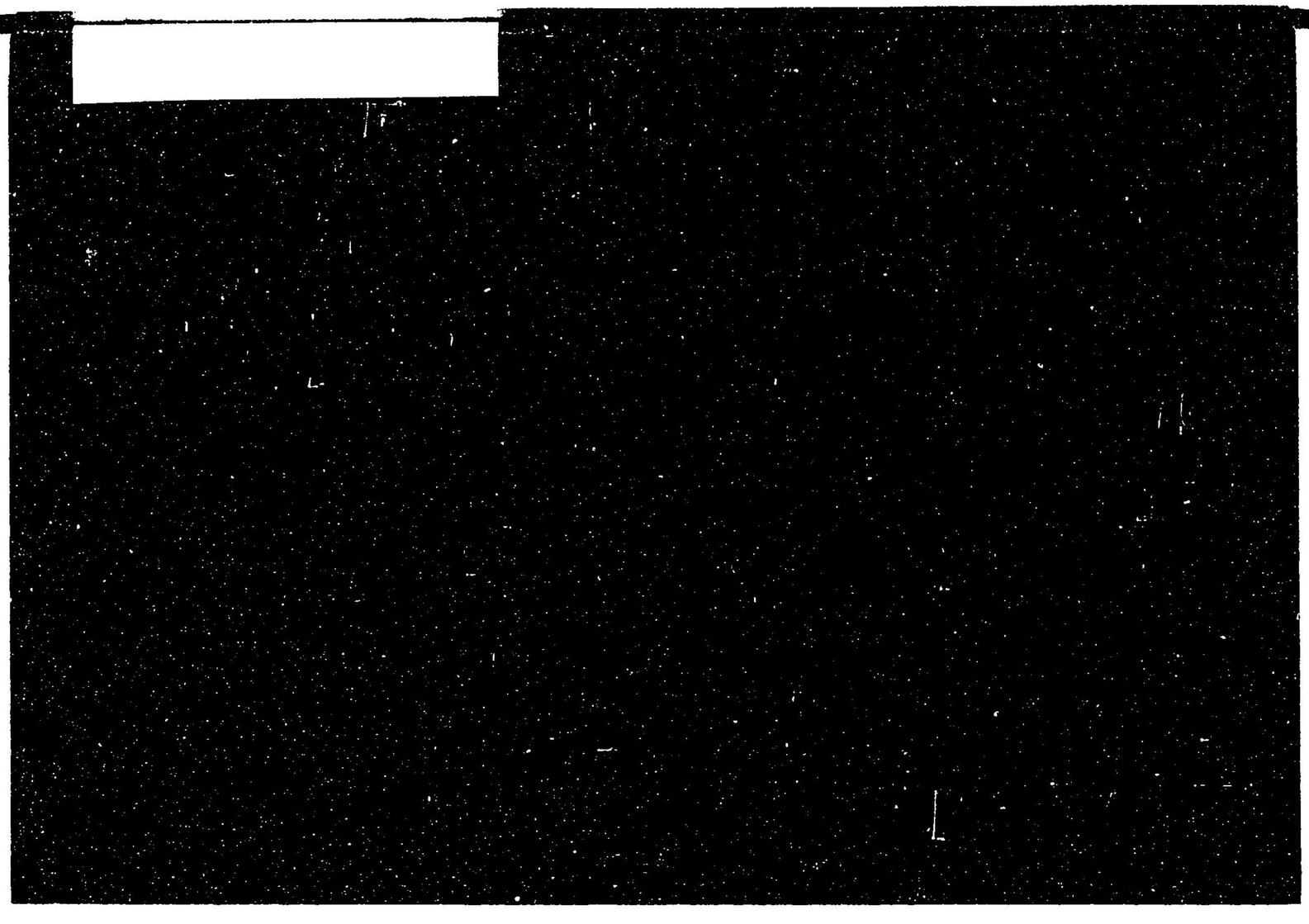
今や氏は一塊の土となったが、その名は幾千年の後迄も、決して朽ちもしませんです、勇子たるものは、誰もかくこゝろありたきものです、

明治二十八年二月五日印刷
仝　年二月廿五日發行

編輯兼發行者　日本橋區柳原河岸二號地　三好守雄

印刷者　神田區柳原河岸十一號地　新雲堂大塲沃美

發行所　日本橋區柳原河岸二號地　學友館



特13
273

勇気の教育

国立国会図書館

002713-000-4

特13-273

勇気の教育

三好　守雄／編

M28

ACB-6169